

市島邸資料館リニューアルオープン展示

会期	平成28年10月1日（土）～
休館日	毎週水曜日（祝日の場合は翌日休館）
開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料	[個人] 大人 600円 小・中学生 300円 [団体]（20名以上） 大人 540円 小・中学生 250円
ギャラリートーク	日時：平成28年10月1日（土） 午前の部 午前10時～ 午後の部 午後2時～ 講師：藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館担当課長）
主な展示品	○市島家の歴史 市島金華書双幅「花迎劍佩星初落」 / 家伝薬方帖 / 蒲原絵図 / 越後府献地献米金お聞届書 ○市島分家の人々 青葱館記拓本 / 市島岱海書幅「天王詩」 / 市島春城書「越国世家」 ○市島家繁栄の基盤 寛政二年福島潟検地図 / 継志園記拓本 ○千町歩地主の蔵の中 酒井抱一画「干鮭図」 / 永楽造錦出食器揃 / 加賀蒔絵漆塗四方盃洗壺対 ○近代市島家の生活と文化事業 貴族院多額納税者議員互選人名 / 諸橋轍次二行書幅「為天地立心」 / 吉田東伍「大日本地名辞書」

主 催/ 新発田市 協 力/ 早稲田大学図書館
お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

市島邸資料館リニューアルオープンにあたって

平成28年秋、市島邸は新しく生まれ変わりました。

ご来邸いただく皆さんに、市島家のこと、そしてその周辺の歴史や文化についてより多くのことを知っていただけるよう展示内容を一新しました。

市島家は16世紀の末に新発田の地にやってきたとされています。それから400年以上、地域の政治、経済、文化に深いかかわりを持ってきました。それは全国で数少ない「千町歩地主」の一つとして、新田開発はもちろん貧困者の救済や災害支援、道路整備といった、今で言うさまざまな社会福祉事業を通じて地域に貢献してきた歴史でもあります。また豊饒の地として知られる越後国には、全国からさまざまな物資が集まり、江戸、大坂といった大都市で活躍する文人たちもたびたび訪れていました。市島家でもそうした物資を入手し、文人たちと交流していたことが今日遺る文物を通じてうかがい知ることができます。

市島家、特に宗家は近代以降も発展を遂げますが、豊富な財力を自家のためだけでなく、周辺地域はもちろん、全国各地の優秀な学生を支援したり、有益な出版事業に出資をするなど、将来の人材育成、文化の発展のために費やしてきました。

そんな市島家ですが、一つの家の力だけで今日まで続いてきたわけではありません。宗家と分家という一族の結合によって支えられてきたのはもちろん、往時の繁栄は地域の人々とともに生きて来たからこそ実現できたものでしょう。その意味でも市島家の歴史を知ることが新発田地域の歴史、さらには越後の歴史を知ることでもあります。

これからの市島邸はそうした地域の歴史、文化に関する情報発信の場として、皆様とともに活用していきたいと思えます。

市島邸 資料館リニューアル展示出陳リスト

○市島家の歴史

1	市島家家系図(パネル)		
2	市島金華書双幅「花迎劍佩星初落」		紙本墨書
3	家伝葉方帖		寛政9年(1797)9月
4	永代苗字御免状	小笠原友右衛門→市島徳次郎	天明4年(1784)12月11日
5	蒲原絵図(越後絵図のうち)		紙本彩色
6	越後府献地献米金御聞届書 一括		慶應、明治
7	市島徳次郎大理石像		大正6年(1917)6月
8	市島徳次郎(湖月)勲六等瑞宝章勲記		
9	市島徳次郎(湖月)勲章 各種		

○市島分家の人々

10	市島家分家略系図(パネル)		
11	青葱館記扁額	巻菱湖	木額
12	青葱館記拓本	市島春城題字	紙本墨拓
13	市島春城書扁額「青葱館」		紙本墨書
14	市島子協墓表拓本(パネル)	原本所蔵:新潟県立図書館 画像提供:新潟県立図書館	天保6年(1835)
15	学半楼記(パネル)	原本所蔵:新発田市立図書館 画像提供:新発田市立図書館	
16	太上感応経	巻菱湖書	紙本墨書
17	市島岱海書幅「天王詩」		紙本墨書
18	随筆 頼山陽(市島春城選集 2)	市島春城著	中央公論社、昭和17年(1942)
19	市島春城書扁額「抛磚引玉」		紙本墨書
20	家廟之紙碑	市島成一編	継志会、昭和16年(1941)
21	市島春城書「越国世家」		紙本墨書
22	市島春城刊行随筆等一括		
23	會津八一和歌色紙幅「かきのみを」		紙本墨書
24	會津八一刊行歌集等一括		

○市島家繁栄の基盤

25	寛政二年福島潟検地図		紙本彩色、天保2年(1831)写
26	現在の福島潟(パネル)		平成28年(2016)8月撮影
27	継志園記拓本		紙本墨拓
28	継志園記碑陰記	星野恒撰、市島春城識	昭和6年(1931)
29	市島本支六家議定(パネル)	新発田市所蔵(新潟県立文書館寄託)	
30	市島家家憲(パネル)		

○千町歩地主の蔵の中

31	草花図短冊貼込屏風 六曲一隻	酒井抱一	絹本著色
32	酒井抱一画「干鮭図画賛」	酒井抱一	紙本淡彩
33	光琳百図・光琳百図後編	尾形光琳画、酒井抱一摸、亀田鵬斎撰	細川開益堂、明治23年(1891)
34	池大雅七言対句屏風 二曲一隻		紙本墨書
35	永楽造錦出食器揃		
36	紅溜塗螺鈿飯器揃		漆、螺鈿
37	盃洗(金時絵漆塗)		
38	時絵農耕之図三ツ組盃		漆、金
39	加賀時絵漆塗四方盃洗壺対		漆
40	金時絵重箱与の重		漆、金

○近代市島家の生活と文化事業

41	貴族院多額納税者議員互選人名	朝野新聞4978号	明治23年5月16日
42	新潟県下政治家人物競		明治23年1月20日
43	市島邸を訪れた大隈重信と綾子夫人(写真)		大正2年(1913)9月14日
44	大隈重信と市島春城	市島春城「回顧録」口絵	中央公論社、昭和16年
45	国書刊行会叢書		明治38年(1905)～大正11年(1922)
46	大日本文明協会叢書		明治41年(1908)～大正14年(1925)
47	諸橋轍次二行書書幅「為天地立心」		紙本墨書
48	大漢和辞典	諸橋轍次	大修館書店、昭和35年(1960)
49	大日本地名辞書	吉田東伍	富山房、明治33-40年(1900-1907)
50	市島塾々生原簿・市島塾々外生原簿・ 市島塾々外生費目年鑑(複製)	国立国会図書館所蔵 <国立国会図書館デジタルコレクションより>	大正15年～昭和18年(1926～1943)
51	市島宗家予算・決算関係書類一括		
52	市島家家政文書用版木一括		
53	市島家事務所職員(写真)		
54	市島ジュン米寿祝貼込屏風	市島事務所職員→市島ジュン	昭和16年(1941)
55	市島徳厚所用品(湖月時代からのものを含む)		

市島家の歴史について

■市島家のはじまり

市島家発祥の地は丹波国氷上郡市島村(現、兵庫県丹波市市島町)にあるといわれています。永禄年間(1565～1568)頃、隣国の若狭国高浜(現・福井県大飯郡高浜町)へ移りました。当時この地を治めていたのは後に新発田藩主となる溝口氏でした。

■新発田への移住

その後、加賀国大聖寺城主となった溝口氏は豊臣秀吉のもとで勲功をあげ、慶長3年(1598)、新発田6万石の城主となります。市島家も遠祖・治兵衛のとき、高浜から大聖寺、新発田と溝口氏に従って移り、五十公野(現、新発田市五十公野)に居を定めました。なお、現在は治兵衛の孫、同じく治兵衛を市島家初代としています。初代治兵衛の子、2代喜右衛門(又兵衛)は水原(現、阿賀野市水原)に移り、こののち家業となる薬種業はじめました。

■南山八子～宗家と分家～

3代喜右衛門(号、南山)は売薬を中心に山形や京都、大坂まで取引を広げました。南山は多くの子に恵まれ、長男徳次郎(金華)を後嗣とし、その兄弟たちにも水原、下条、新発田、葛塚等に家をたてさせ、今日につながる宗家・分家体制を確立しました。

■千町歩地主としての歩み

宗家4代徳次郎(金華)は家業である薬種業だけでなく海産物等の移送で財を築き、それによる土地集積を進め、晩年には石高換算7000石に及ぶほどでした。「千町歩地主」と呼ばれる市島家の基礎は南山から金華の時代に築かれたと言ってよいでしょう。その後、宗家5代徳次郎(処徳)、6代徳次郎(光広)と発展を遂げるとともに、貧民救済、公共事業

事業への出資といった社会福祉活動に大きな貢献をしました。

■幕末の動乱と市島家

水原の地に暮らすこと約150年、明治維新の動乱が市島家を襲います。戊辰戦争によりそれまでの屋敷が戦火で焼失したため、宗家7代徳次郎(静月)は明治10年、天王の地に新たな邸宅をつくり移り住みました。それがこの「市島邸」です。静月は明治新政府に対し、米穀、金銭、さらにはそれまで住んでいた水原の地を提供することで新時代に対応、明治以後の発展の地盤を固めました。

■明治から昭和へ

静月の子、宗家8代徳次郎(湖月)は天王村初代村長、貴族院議員、また第四銀行でも要職をつとめるなど政財界の要職に就くとともに、近代的な大地主として地域開発と家政運営につとめました。福島潟全面が市島家の所有となったのも湖月の時代です。しかし、市島家の隆盛も戦争という大きな力にはあらがうことができませんでした。湖月の子、宗家9代徳厚は、敗戦後の農地改革が進むの中で市島家の存続に力を尽くしましたが、かつての繁栄を回復することはできませんでした。

■現在の市島家

徳厚が活用を目指した福島潟では、その後一部で国営の干拓事業が進み、今でも秋になると黄金色の波が揺れています。また野鳥観測のスポットとしても有名になり、人々の憩いの場となりました。そして、徳厚のおこなった育英事業は多くの人材を育成し、彼が支援した文化事業はさまざまな成果を遺しました。そうした人々があらたな人を育て、また文化事業の成果は新しい教育、研究の基盤となっています。

人と文化の発信拠点、市島家、そして市島邸はそんな存在として、この天王の地に今もあり続けます。

市島邸 資料館リニューアル展示

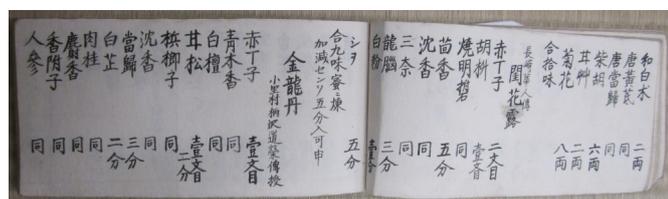
市島家の歴史



2. 市島金華書双幅 紙本墨書

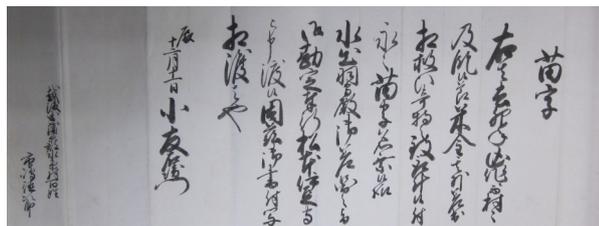
宗家4代・市島徳次郎（修徳、号・金華、1734～1804）は、市島家の宗家、分家体制が確立した時代の当主である。父・喜右衛門（南山）のときに家産形成の基礎が築かれたが、金華は本来の薬種だけでなく海産物などさまざまな物品を大坂に輸送することで莫大な利を得、その財力をいかして土地集積を進め、晩年には500町歩以上、7000石相当とも言われる広大な土地を所有するに至った。これはその金華による書幅で唐代の詩人・岑参（715-770）の七言詩の一節である。

「花迎劍佩星初落 柳払旌旗露未乾」



3. 家伝薬方帖 寛政9年（1797）9月吉日

市島家は江戸時代「薬種業」を営み山形、米沢にまで支店をおき京都、大坂とも広く取引をして財を成したという。本帖は宗家4代市島徳次郎（号、金華）の頃のもので、様々な調薬方法が細かく書いてある。



4. 永代苗字御免状写（小笠原友右衛門→市島徳次郎）

天明4年(1784)12月11日

前年（天明3年）の飢饉に際して貧窮者救済に功績があったことを賞し、永代にわたる苗字の使用を許されたもの。老中格水野出羽守忠友の命を勘定奉行松本伊豆守秀持が受け、そこから水原代官・小笠原友右衛門を通じて市島徳次郎（宗家4代・修徳、号・金華）に与えられている。この後金華には、さらに天明6年の手賀沼干拓への上納金2000両により永代帯刀と三人扶持が認められる。当時、幕府や大名がおこなう社会福祉活動、公共事業については各地の豪農、豪商に費用を負担させることが多く、苗字帯刀といった榮譽、さらには若干の金員が褒賞として与えられた。



5. 蒲原絵図（越後国絵図 7舗のうち）紙本彩色 江戸時代

越後国全体を7舗の彩色絵図で描いたもののうち、現在の新発田市周辺を含む蒲原地区の絵図。成立年次は未詳だが、同様の絵図が江戸時代を通じて数回にわたって幕命で作成されていることから、それに関連して作成されたものと思われる。

市島邸 資料館リニューアル展示

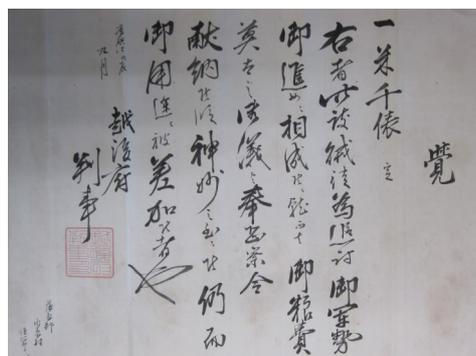
市島家の歴史

明治維新と市島家

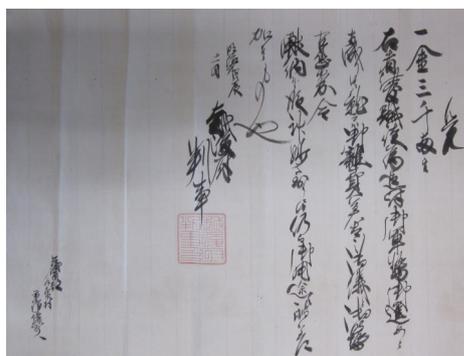
宗家3代喜右衛門(南山)以来発展を遂げた市島家に大きな転機が訪れます。明治維新、徳川幕府の終焉と新政府の成立です。この激動の時代にあつて、宗家、分家それぞれに重大な決断が迫られることになりました。それまで各家はその財力を持って幕府や周辺諸藩を経済的に支えていました。特に新発田藩と関係が深かった丸市、金市両家や、三根山藩と近かった角市家は幕末の混乱期に大きな経済的打撃を受け、結果として明治期以降は大きな発展ができませんでした。一方宗家は、江戸時代を通じて幕府への上納金は優に1万両をこえるほどでしたが、戊辰戦争が始まると新政府支持へと大きく舵をきります。戦争で水原の邸宅(天朝山・天長山)が幕府軍によって焼かれると、その後進軍してきた新政府軍にその土地を提供、そこには越後府がおかれることとなりました。さらに金3000両、米1000俵等多額の支援をし、新体制との関係づくりを積極的に進めました。その結果、市島宗家は明治時代以降も越後の豪農として大きく発展してゆくこととなります。

6. 越後府献地献米金御聞届書

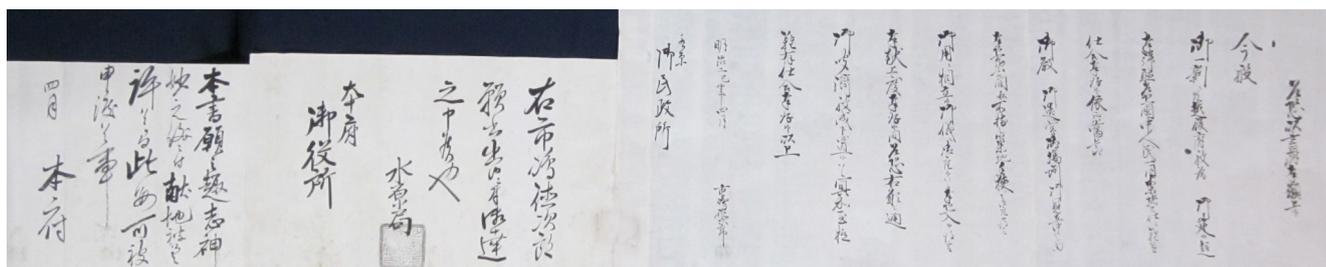
明治元(慶応4) - 明治2年(1868-1869)



米千俵献納聞届書
越後府判事→(市島)徳次郎
慶応4年(1868)9月



金三千両献納聞届書
越後府判事→市島徳次郎
明治元年11月



自家屋敷地献上願
市島徳次郎→水原民政所(明治2年4月)
付:市島徳次郎願書添状(水原局→越後府役所)、献地願聞届書(越後府、明治2年4月)

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家の歴史

市島宗家7代 市島徳次郎(号、静月、文化7年[1824]～明治25年[1892])

明治維新という時代の転換期は、人々に重大な決断を迫るものでした。中には旧時代からの流れを変えられないまま、衰運に向かう家もありました。市島家の中でも丸市、金市、角市等の各家がそうした悲運の家であったようです。ただ宗家は動乱の中で巧みに情勢判断をし、新しい時代と向き合ってゆきました。その主役となったのが静月です。旧幕時代には江戸城普請、湾岸警備、長州征伐等に1万両を超える資金を幕府のために用立てた静月でしたが、戊辰戦争が始まると新政府に対し3000両を献上したほか、越後府設置にあたっては土地(現、阿賀野市水原の天朝山)を献納し協力関係を築くことで、その後の発展を確実なものとししました。新たな経済活動の基盤として銀行制度が整備され、各地に国立銀行設置の機運がたかまると、第四国立銀行(現・第四銀行)創設に尽力しました。静月は激動の時代を巧みに生き抜いた当主だったと言えるでしょう。また天王新田の新邸、すなわち現在の市島邸を建造し、移り住んだのも静月の時代、明治10年のことでした。



市島邸 資料館リニューアル展示

市島家の歴史

市島宗家8代 市島徳次郎(号、湖月、弘化4年[1847]～大正6年[1917])

明治5年(1872)、31歳で家督を譲り受けたという若き当主は、江戸時代の豪農を近代的な千町歩地主へと成長させた人物であり、さらに明治22年(1889)天王村の初代村長となり、その翌年には国会開設にともなう第1回帝国議会選挙で多額納税議員として新潟県を代表して貴族院議員にも選出されています。また父静月が創設にかかわった第四銀行でも要職をつとめ、政財界でも重要な役割を果たしました。その一方で皇居造営費献上、天王小学校建築費寄付、さらに早稲田大学の基金募集にも協力、遠縁にあたる吉田東伍編纂の『大日本地名辞書』出版にあたっては資金援助をおこなうなど、歴代当主と同じく公共事業、文化行政への投資も惜しみませんでした。家政運営では従来の番頭・手代制から実務に即した部門別の業務体制へと転換、事務処理の合理化をはかりました。そして個人的には写真技術はプロ級、建築に至っては市島邸の湖月閣や庭園、東京下谷、神奈川鶴見等の別邸の設計に携わったとも言われています。湖月はそんな明治のマルチ人間だったのです。



7. 市島徳次郎大理石像

第四銀行 大正6年(1917)6月

市島宗家8代市島徳次郎(号、湖月)の像。第四銀行で要職をつとめた湖月の業績をたたえ、没後この大理石像が銀行より贈られた。第四銀行は明治5年(1872)に定められた国立銀行条例に基づき、翌年(明治6)湖月の父、宗家7代市島徳次郎(号、静月)が企画に関わり、「第四国立銀行」として創業したという歴史がある。また湖月の子である徳厚も取締役となっており、三代わたってその要職を務めている。



8. 市島徳次郎勲六等瑞宝章勲記



9. 市島徳次郎勲章 各種

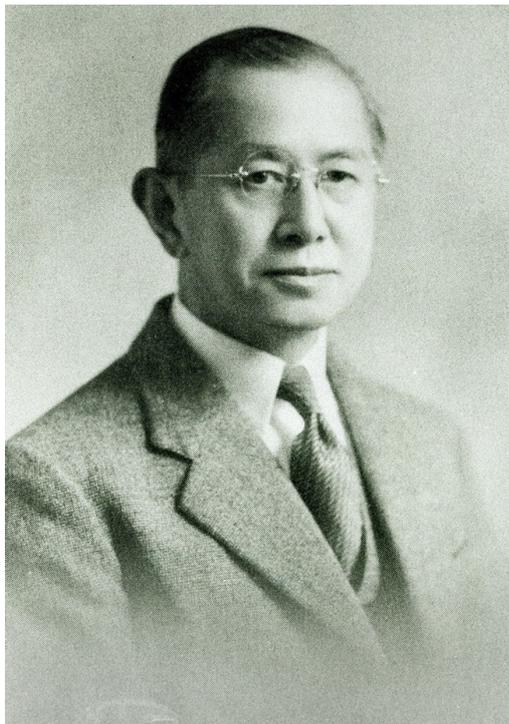
歴代当主と同じく公共事業、文化事業を推進した市島徳次郎(号・湖月)が受けた数々の勲章。

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家の歴史

市島宗家9代 市島徳厚(明治26年[1893]～昭和34年[1959])

先代徳次郎(湖月)の十子として生まれ、慶應義塾大学を卒業後、兄たちが夭折したこともあり亡くなった父の家督を相続しました。父の代に福島潟を完全取得していた市島家の水田面積は大地主が集中する蒲原地区でも最大の規模となっており、さらには所有山林の開発、福島潟における漁業など、経営は多方面に及びました。そうした土地経営者であると同時に、徳厚には育英事業家としての顔がありました。まず、大正末期から昭和初期にかけ、市島家の一族だけでなく使用人や小作人の子弟に対しても育英の目的で学費援助をしていました。その後東京林町の別邸内に県外者もふくめた寄宿舎である「市島塾」を創設、常に青少年の教育に理解と関心が深い人でした。しかし、市島家の経済基盤は昭和20年(1945)の敗戦後、農地改革などの影響で大きく揺らぎます。徳厚はその激動の中で市島家の存続に東奔西走しましたが、残念ながらその努力の数々は実を結びませんでした。ただ、福島潟の積極的な活用といった理想は、後の世につながる部分もあったかもしれません。



市島邸 資料館リニューアル展示

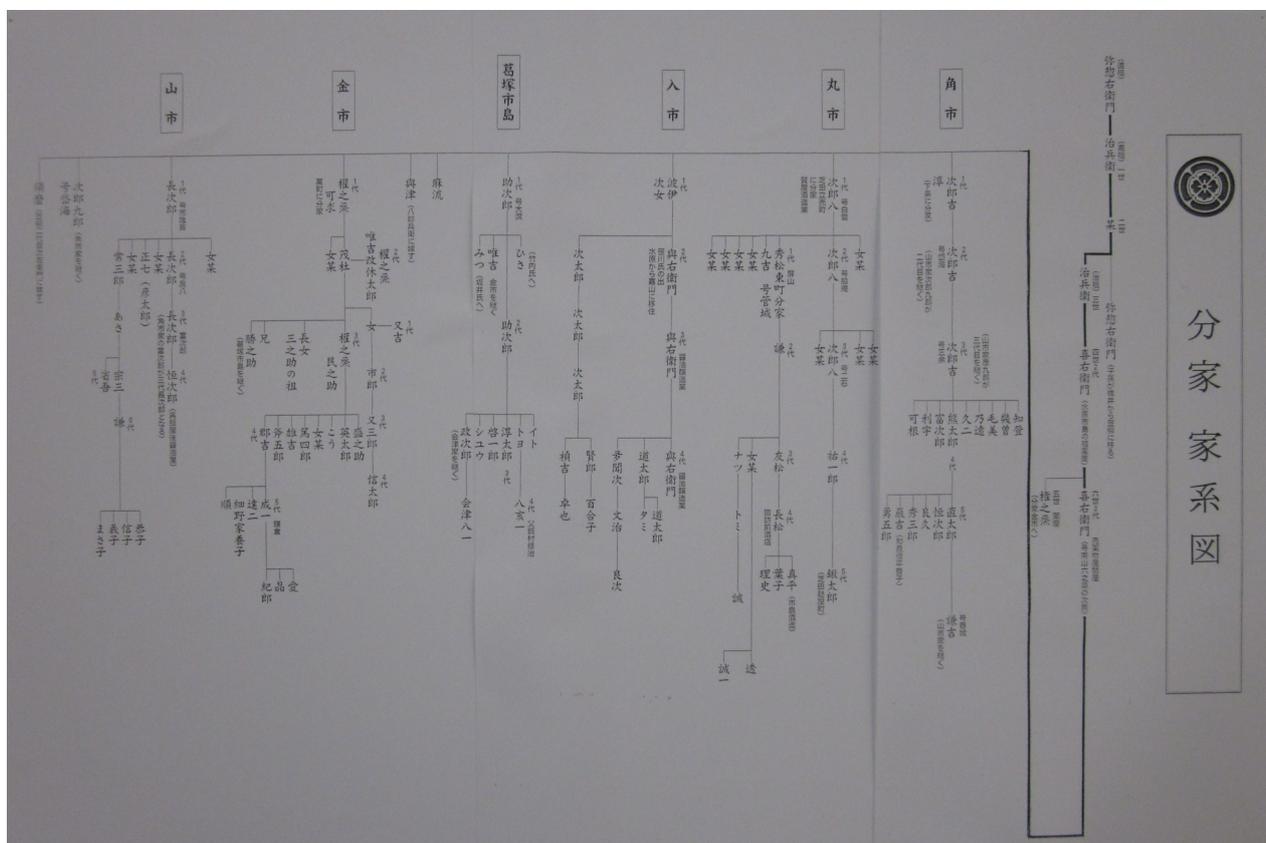
市島分家の人々

市島家は江戸時代以来、宗家(本家)と、水原、下条、新発田、葛塚等に住む複数の分家で構成されており、それぞれが独立して運営されていましたが、お互いに苦しいときには助けあうことを常とし、それこそが市島家の繁栄を支えたのです。

そうした宗家、分家体制は3代喜右衛門(南山)の子供たちの時代に確立しました。各分家は質屋、酒造業、廻船業等さまざまな家業により家産を形成し、宗家同様に多くの土地を取得、福島潟やその周辺を中心に地域の発展に大きな成果をあげました。

一方で肥沃な越後の地には、全国各地からさまざまな文物が到来するとともに、人々の交流も盛んでした。江戸や大坂といった大都市で活躍する学者、文人たちもこの地を訪れ、市島家の人々と交流していたようです。そうした中で市島家からも学術、文化に秀でた人々が出現、多くの作品を遺しました。

ここではそうした分家の人々や彼らと交流のあった文人たちの作品を中心に紹介します。



10. 市島家分家略系図

市島邸 資料館リニューアル展示

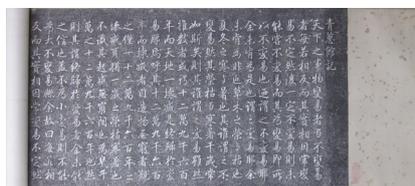
市島分家の人々



1 1. 青葱館記扁額

丹羽恵(伯弘)撰、巻大任(菱湖)書

市島家の分家、金市市島家2代権之丞が新発田藩士の儒者、丹羽恵に撰文を依頼、それを巻菱湖が書いたものである。高名な書家である菱湖の書ということで、江戸で作らせた扁額の拓本を欲しがるといふものが続出し、権之丞の手元に届く前に拓本が出回ったので激怒したという逸話が残っている。昭和初期に市島家とも姻戚関係にある中条町の丹呉家から金市市島家におくられた。青葱館とは金市市島家の新発田萬町(よろずちよう)にあった屋敷のことで、初代権之丞の頃からその名称を用いていたとされる。

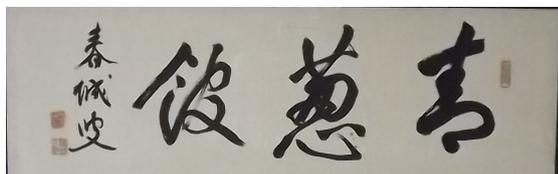


1 2. 青葱館記拓本

紙本墨拓 市島春城題字

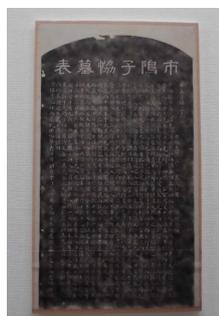


青葱館記扁額の拓本を卷子に仕立てたもので、題簽の文字は角市市島家6代当主である市島春城(謙吉)による。春城には別に「青葱館」の書扁額(13)がある。



1 3. 市島春城書扁額「青葱館」

丸市市島家2代次郎八(克一、子協)の墓表。丸市市島家は初代次郎八(白雪)のとき、質屋、酒造業などで財をなし、新発田藩の御用達となった。また、代々詩文にも優れ、白雪とその子、子協、屏山(泰・秀松)、菅城(九九吉)の三兄弟は深い学識と豊富な財力で、文化・文政～天保期の新発田を文化面から支えた。同時代の人々との交流も多く、当時の越後を代表する3人がかかわった本資料はまさにその象徴的なものといえる。特に子協と丹羽伯弘(恵・思亭)は親交があつく、子協は思亭を経済的にも支えていたという。



1 4. 市島子協墓表拓本(パネル)

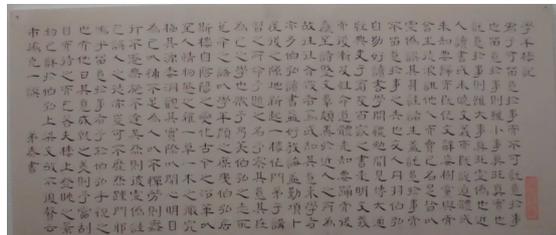
丹羽恵(伯弘)撰、巻大任(菱湖)書、館機(柳湾)題 天保6年(1835)

原本所蔵：新潟県立図書館

画像提供：新潟県立図書館

市島邸 資料館リニューアル展示

市島分家の人々



15. 学半楼記 (パネル)
市島子協撰、市島屏山書 天保2年 (1831)

新発田藩では学問が奨励され多くの私塾が開設されたが、藩士にして儒学者の丹羽伯弘 (名・憲、号・思亭、1795-1846) による積善堂もその一つ。一方、丸市市島家2代次郎八 (名・克一、号・子協、1790-1835) やその弟で諏訪前市島家初代となった秀松 (号・屏山、1793-1846) は詩文をよくし、思亭とも交流があった。これは思亭があらたに開いた学舎「学半楼」に子協、屏山が贈ったもので、彼の学問、人柄を的確に表現している。

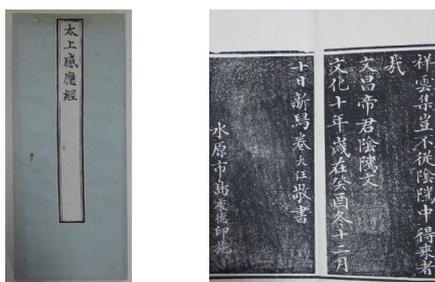
原本所蔵：新発田市立図書館

画像提供：新発田市立図書館

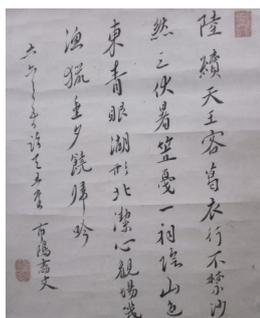


16. 太上感應経
卷大任 (菱湖) 書 文化10年 (1813) 12月10日

太上感應篇ともいい、本来は道教の経典であるが、人の生き方、心得を説いた勸善の書として広く民間に流布した。人が善く生きるためには多くの善行を積まなくてはならないとして、様々な善行と悪行を列挙してある。菱湖が宗家5代徳次郎 (千吉、処徳) の依頼により揮毫したもので、のちに本書巻をもとにして法帖仕立てで刊行された。



16. <参考>太上感應経刊本



17. 市島岱海書幅「天王詩」
市島肅文 六月五日詣天王堂

市島次郎吉 (岱海・肅文、宝暦7年 [1757] ~文化10年 [1813]) は角市市島家2代当主。宗家 (本家)、分家ともに多くの学者、文人を輩出した市島家であるが、「要するに水原儒林空前の明星であつた」 (小林存『水原郷土史』) と言われた岱海は、最も秀でた存在であったと言ってよいだろう。自宅でおこなっていた漢籍の講義には家に入りきらぬほどの人々が集まったという。享和元年 (1801) から数年をかけて漢詩文集「岱海堂文集」20巻を刊行した。

この書幅は岱海が天王祭の様子をあらわしたもので、現在は7月におこなわれている天王祭りだが、旧暦では6月となる。真夏の暑さの中、賑わいをみせる祭りの様子を簡潔に描写し、あわせて天王の豊かさを視覚的に表現している。

陸続天王客 褐衣行不禁 沙然三伏暑 笠屐一祠陰
山色東青眼 湖形北白心 観場幾漁獵 向夕饒鼎吟

市島邸 資料館リニューアル展示

市島分家の人々

市島謙吉(号・春城、安政7年[1860]～昭和19年[1944])

春城市島謙吉は、市島家の分家である角市・市島家の第6代当主です。明治11年(1878)東京大学に進学、同級生には坪内逍遙、高田早苗らがいました。その高田を通じて小野梓、さらには大隈重信の知遇を得ると、明治14年(1881)卒業を前に大学を中退し、翌年立憲改進黨に入党し、東京専門学校(現在の早稲田大学)創立にも関与することとなります。その後新潟新聞、読売新聞等でジャーナリストとして活躍、衆議院議員となりましたが、明治34年(1901)病のため政界からの引退を余儀なくされます。明治35年(1902)東京専門学校が早稲田大学に改称されると、高田早苗の求めに応じ、早稲田大学の初代図書館長に就任、それまで3万冊程度しかなかった蔵書を就任からわずか5年で10万冊の大台に乗せただけでなく、さまざまな良書の収集、公開に努める傍ら日本の図書館界の発展にも尽力しました。生涯にわたり日誌、筆録類を多数執筆しましたが、それらは現在、早稲田大学図書館等に收藏され、日本近代史研究の貴重な資料となっています。市島宗家とは疎遠になった時期もありましたが、生涯を通じて交流を続けました。新潟を中心とした春城や大隈重信の政治活動、早稲田大学の基金募集やさまざまな文化活動に関して市島宗家の果たした役割は大きいものがありました。これに対して春城もまた、市島塾の顧問となるなど宗家の活動を支えていたのです。多面的な活躍をした春城でしたが、20数冊の随筆集を刊行した随筆家としても知られています。



2.2. 市島春城刊行随筆等一括

市島春城は、大正10年(1921)刊行の『蟹の泡 奇談一五〇篇』を皮切りに、昭和17年(1942)『随筆 頼山陽』(市島春城選集2巻)まで20冊以上の著書を刊行している。その内容は自らの生涯、早稲田大学や大隈重信に関するものはもちろん人物評伝やさまざまな趣味に関するものなど実に多岐にわたっている。

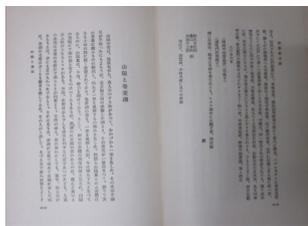


春城市島謙吉像(市島邸)

同じ銅像が早稲田大学図書館にもある。

市島邸 資料館リニューアル展示

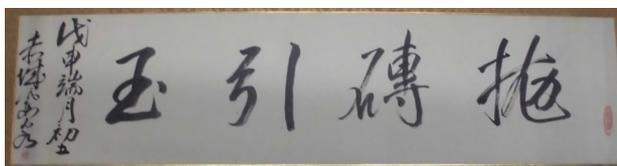
市島分家の人々



18. 随筆 頼山陽（『市島春城選集』2）

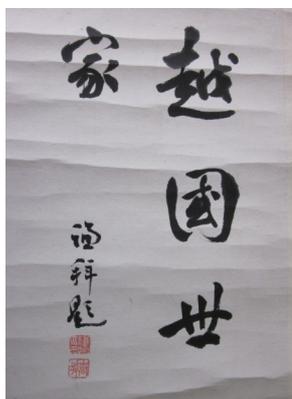
市島春城著 中央公論社、昭和17年(1942)

随筆のはしがきに、「私は青年時代に頼山陽が好きで（中略）随分、山陽に傾倒したものであった」とあるように、春城は頼山陽の熱心な愛好家であり、また研究家であった。長年の研究成果をまとめ刊行したものがこの『随筆頼山陽』である。本書は大正14年(1925)に初版が刊行され、その後訂正増補版、改訂決定版と版を重ねた。これはその最終版ともいえるものである。『市島春城選集』は「回顧録」を1、本書を2とし、この後「趣味談叢」「訪書余録」「人物雜観」「雅俗相半録」と続くはずだったが、未刊に終わった。



19. 市島春城書扁額「抛磚引玉」 明治41年正月5日

「瓦をなげすてて玉を引く。人に和韻を請う時の謙辞」（『大漢和辞典』）。この年、春城は自身が所有する高芙蓉（1722～1784、篆刻家、儒学者）の印を坂口五峰に所望され、それに応じることとしたが、代わりに詩を一篇作成することを条件とした。五峰はこれに応え「鶏血石歌」を春城に贈った。有名な「印の結婚」の逸話である。この席上、立会人となった漢詩人・大久保湘南が春城のために新たに印文を撰んだが、それがこの「抛磚引玉」と落款にある「赤城霞客」である。



21. 市島春城書「越国世家」 紙本墨書

春城が市島成一が編集した『家廟之紙碑』（20）の題字として揮毫したもの。「世家」とは、その国にあつて代々重要な役割を果たす家柄を指す。越後の国になくはならぬ家である市島家の家史にふさわしい言葉として選んだものであろう。

市島邸 資料館リニューアル展示

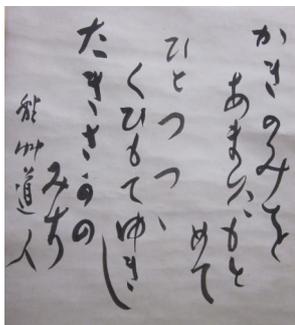
市島分家の人々



24. 會津八一刊行歌集等

會津八一（あいづ やいち） 明治14年（1881）～昭和31年（1956）

歌人、書家、美術史家として同時代の人々に多大な影響を与えた會津八一（号・秋艸道人、渾齋）もまた市島家ゆかりの人物である。葛塚市島家2代・助次郎の子である政次郎が會津家に入り八一が生まれた。長じてのち上京し、早稲田大学文学科を卒業、母校の教授となり東洋美術史を講じた。若い頃から古都・奈良を愛し、教授時代にも学生たちを連れてたびたび訪れるとともに古都への憧れを歌った『南京新唱』『鹿鳴集』は今なお多くの読者を得、歌碑も全国各地に数多く建てられている。戦後は大学を退職（名誉教授）し帰郷、歌集の刊行、書画展を開催するなどして過ごした。なお若いころに上京した八一を支えたのが、市島春城であり、八一が「秋艸堂」と名付けた東京下落合の住まいは春城の所有であった。



23. 會津八一和歌色紙書幅「かきのみを」 紙本墨書

「滝坂の道」は奈良・新薬師寺の東、柳生街道の一部をなす山道で、紅葉の名所とも言われている。八一の歌集『自註 鹿鳴集』には、

かきのみを になひてくだる むらびとに いくたびあひし たきさかのみち

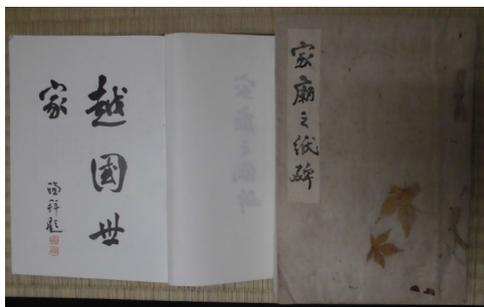
まめがきを あまともとめて ひとつづつ くひもてゆきし たきさかのみち

という本色紙の歌をわけたような2首が収められている。

かきのみを あまともとめて ひとつつゝ

くひもてゆきし たきさかのみち

秋艸道人



20. 家廟之紙碑 市島成一編（継志会）
昭和16年（1941）

宗家の成立から宗家・分家体制の確立、さらには近代における各家の状況に至るまで、関連資料を引用しながら紹介した市島家の家史。書名は題字を寄せた市島春城がつけたもの。編者である市島成一（1899～1987）金市市島家の人で、宗家から経済的支援を受けて京都帝大卒業後、東京地方裁判所検事、最高検察庁刑事部長、東京高等検察庁検事長などを歴任。市島宗家9代徳厚（1893～1959）の没後、市島家を財団化し「継志会」を組織、その理事長となった。

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家の歴史

福島潟の開発

寛政元年、幕府は新発田藩から福島潟一帯を収公し、翌年水原代官所を通じて市島徳次郎ら「十三人衆」に開発を命じました。これはその際の検地絵図を文化2年に写したもののさらなる写しです。福島潟の開発は享保年間(1716～1736)頃から新発田藩、幕府によって進められましたが思うように進展せず、寛政2年(1790)、あらためて幕府の事業として水原代官所を通じて13名の者たちに開発の命が下りました。その筆頭となったのが、市島徳次郎(宗家4代金華)です。市島家からは他に、次郎吉(角市)、長次郎(山市)が十三人衆として開発に参加しました。しかし、文政6年(1823)、開発の主導権が幕府から新発田藩に移り、十三衆の土地も藩が買い上げることとなりました。さらに幕府から明治にかけて複数の手を経て、明治44年(1911)市島宗家8代徳次郎(湖月)の時、福島潟はついに市島家の所有となったのです。



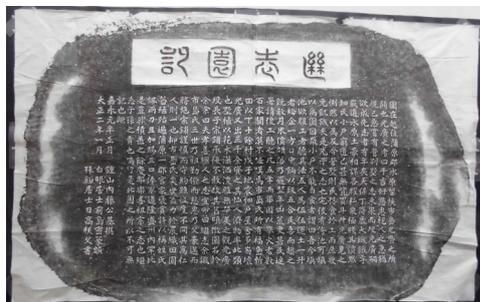
25. 寛政二年福島潟検地図 天保2年写



26. ビュー福島潟から見た現在の福島潟

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家繁栄の基盤

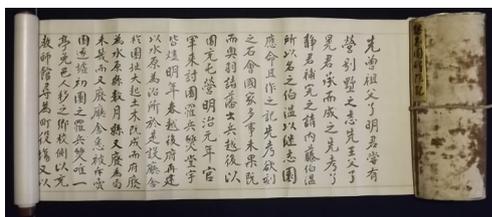


27. 継志園記拓本

継志園は、市島宗家6代徳次郎(光広、1806-1843)が父の遺志を継いで水原の地に築いた別邸である。大飢饉となった天保8年(1837)、市島家を含む豪農たちは家蔵の米穀を安価で販売したが、それでも貧窮した人々には購入できず難渋していた。そこで徳次郎(光広)は自宅裏の池の埋設工事を実施、そこに参加した者に工賃を与えるとともに1日5合の食事を提供した。翌年再び飢饉となるや人々は工事の再開を依頼、その後5年に及ぶ別邸建設工事という名の社会福祉事業がなされ、多くの人々を救うこととなった。7代徳次郎(静月)の頃に市島家を訪れた儒学者山本公基(鍾山、1787-1853)がその挙を称賛、後世に伝えるべく邸宅を「継志園」と名づけ、一文を草した。維新の争乱で邸宅は焼失、草稿の存在も忘れられていたが、8代徳次郎(湖月)が探し出し、あらためて建碑を計画、市島春城に相談した。春城は親交のある前島密(1835-1919)に題字を依頼、さらには日高秩父(梅溪、1853-1920、書家)の書を得て大正2年(1913)に碑が作成された。



27. <参考>阿賀野市天朝山継志園碑



28. 継志園碑蔭記 星野恒撰 市島春城識 昭和6年(1931)3月

継志園の成立とその後の経緯をまとめたもの。巻末の春城識語により、歴史学者である星野恒(世恒、豊城、1839-1917)により撰文されたことがわかる。越後国出身で、のちに帝国大学文科大学教授となる星野だが、明治初年には水原の学塾、広業館(弘業館とも。現在の水原小学校)の教壇に立ち、春城もその教えを受けている。



越後国持丸鑑(えちごのくにもちまるかがみ)

江戸時代から明治、大正時代にかけて、こうした番付仕立の長者一覧が各地で多数作成された。これはその越後版で、天保年間(1830-1844)頃に刊行されたと思われる。勸進元として「水原 市嶋徳治郎」をあげているが、これは市島宗家6代徳次郎(号、光弘)のことで、当時すでに所有地は1000町歩に迫る勢いで、資産は石高換算8000石と言われていた。また中央、行事の欄には「市治郎吉」、すなわち角市の3代次郎吉(三余)の名があり、左側最上段に市島権之丞(金市)の名も見えている。

新発田市立図書館蔵(『新潟県史』より)

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家繁栄の基盤

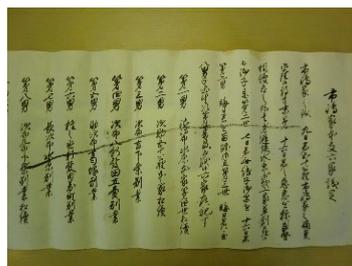
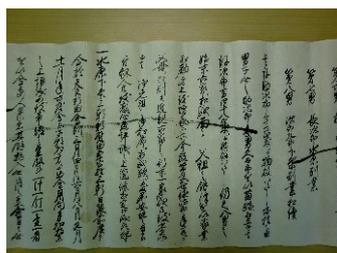
市島本支六家議定

市島家の発展は、三代喜右衛門(号・南山)の子供たちの代に成立した本家(宗家)と複数の分家による経済的、社会的な協力関係がその基盤となっています。

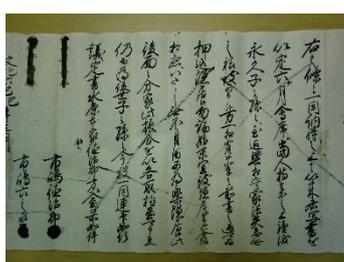
その本家・分家体制を制度的に支えていたのが文化6年(1809)に制定された「市島本支六家議定」です。ここでは最初に「南山八子」と言われた八人の息子たちそれぞれが、誰がどこに分家を立て、またどの家を継いだか記載することで、本家・分家体制の成立の背景を示しています。その上で、本家を中心とした合議制での家政運営について規定しています。

「本支六家議定」が制定されたのは、南山の孫、千吉が本家を継承してしばらくした頃です。宗家の所有地が石高換算で8,000石とも言われたこの時代、若き当主のもと、一族の結束と繁栄を確固たるものとするべく定められたものと言えましょう。

議定原本は宗家に保管され、各家はそれぞれ割印を捺した控を所持していました。現在、文書全体に墨線が引かれ、また捺印部分も墨で抹消されていますが、これは幕末から近代にかけて宗家の盛運に比し、複数の分家が衰退していったことで相互扶助関係を継続することが困難になり、議定そのものが廃止されたことを物語っています。



(中略)



「市島家文書」(新発田市所蔵、新潟県立文書館寄託)

市島邸 資料館リニューアル展示

市島家繁栄の基盤

市島家家憲

明治時代になり、本家中心の家政運営へと転換してゆくなか、本家、分家の関係を明確にし、その運営について規定する新しい規則が制定されました。それがこの「市島家家憲」(明治35年制定)です。

先の本支六家議定が本家も含めた各家の相互扶助体制と合議制を明確にしていたのに対し、この家憲は原則として本家の家政運営についての詳細な規定となっています。

「第一編 総則」から「第九編 家憲の変更」まで全185条に及ぶ規定は、戸主や家族の役割と日々の暮らしぶりについて細かく定めています。また婚姻や分家創設の基準、遺産相続、後継者選定といった将来にかかわる問題についての規定、家政運営のための様々な会議体の設置や主たる使用人の役割といった実務的な項目も数多く設けられており、本家憲が実際の家政運営に即して制定されたことがわかります。

この翌年(明治36年)頃、市島家の家政運営は、従来の番頭・手代体制から、総取締(のち総務理事など)を筆頭とした業務内容による部長体制へと転換、組織の近代化が進められてゆきます。

市島家家憲

第一編 総則

第一条 戸主ハ家長トシテ一家ヲ総攬シ法規及家憲ニヨリ戸主権ヲ行フ

第二条 家族ハ法規及家憲ニヨリ戸主権ニ服従ス

第三条 戸主及家族ハ法規ニ対シ絶対ニ服従ノ義務ヲ有スルト等シク本家憲ニ対シテモ亦絶対ニ従順ニ且ツ永ク後世子孫ニ伝ヘテ堅ク遵守セシムルノ責務ヲ有ス

第四条 家ハ先祖ヨリ代々継承シ来リタルモノナレバ自己ノモノト思フベカラズ之ヲ後世子孫ニ伝ヘテ先祖ノ祭ヲ絶タメシザル様可致ハ代々ノ戸主家族等ノ責務ナリト心得ベシ

以下略(市島成一編『家廟之紙碑』より)

市島邸 資料館リニューアル展示

千町歩地主の蔵の中

千町歩地主の蔵の中

地域の文化、経済の中心的役割であった市島家には、宗家、分家の別なく江戸時代以降多くの人や文物が集まりました。今日その多くは散逸してしまいましたが、それでもなお市島邸の「蔵の中」にはさまざまな書画、器物が所蔵されています。酒井抱一、池大雅といった著名な文人の作とされるものもありますが、彼らが実際に市島邸を訪れたかどうかはさだかではありません。中には直接作者本人から譲り受けたものもあるでしょうが、多くの資料は、歴代の当主が各地から収集してきたものと思われます。また市島家には冠婚葬祭などさまざまな機会に多くの人々が集まりましたが、そうした人々をもてなすための豪華な漆器類が多数所蔵されているのも市島邸の特徴です。それらの資料が保管されている「千町歩地主の蔵の中」をちょっと覗いてみましょう。



31. 酒井抱一 草花図短冊貼込屏風 六曲一隻 絹本着色



38. 蒔絵農耕之図三ツ組盃



39. 加賀蒔絵漆塗四方盃洗老対 漆

市島邸 資料館リニューアル展示

千町歩地主の蔵の中



3 2. 「干鮭図画賛」酒井抱一画 紙本淡彩

酒井抱一(さかい ほういつ) 宝暦11年 [1761] ~文政11年 [1829]

江戸後期の画家、俳人。姫路藩主、酒井忠仰(ただもち)の次男として江戸で生まれる。名は忠因(ただなお)、抱一の号は37歳で出家してからのもの。10代の頃から俳諧や和歌、能などの諸芸に親しみ、文人墨客との交流を深めた。文化6年(1809)に江戸根岸に「雨華庵」を建て、鶯庵を別号とする。絵画、俳諧に秀で、特に尾形光琳に傾倒し、その画風の復興を目指し、江戸琳派の創設者とも言われる。市島邸には複数の抱一作品が所蔵されているが、入手経路についてはほとんどが未詳であるが、市島邸が所蔵する大正5年(1916)の所蔵品の鑑定リスト(「平山堂評価元簿 大正五年六月参日」)が参考になる。これは宗家主人徳次郎(湖月)が市島春城に所蔵品の調査を依頼、春城が懇意にしている古美術商、平山堂伊藤平蔵に評価をさせたもので、「干鮭図」はこのリストに掲載されている。



3 3. 光琳百図・光琳百図後編 明治23年(1891)
尾形光琳画、酒井抱一摸、亀田鵬齋撰、細川開益堂、

尾形光琳(おがた こうりん) 1658~1716

百周忌にあたる文化12年(1815)、光琳に傾倒する酒井抱一は各地に散在する光琳の作品100点を探し出して模写した。本書はそれを抱一と交流のあった儒学者、亀田鵬齋(1752~1826)がまとめたもの。後編はさらに100点について谷文晁(1763~1840)が編纂した。



3 4 七言対句二曲屏風 池大雅書 紙本墨書 二曲一隻

池大雅(いけの たいが) 享保8年(1723)~安永5年(1776)

江戸中期の書家、画家で、与謝蕪村(1716-1783)とともに日本文人画の大成者と言われる。京都の生まれで幼名を又次郎、のち秋平と称し、大雅堂と号した。早くから書画に才能を示し、柳沢淇園(柳里恭、1704-1758、画家、漢詩人)や祇園南海(1676-1751、画家、儒学者)らの教えを受け、独自の画風を確立、また書家としても一家をなした。

鳥識欲心亦舞歌 花迎喜気皆知咲

市島邸 資料館リニューアル展示

千町歩地主の蔵の中



35. 永楽造錦出食器揃

「永楽錦出茶碗」などと書かれた箱に収められており、市島家に伝わったものである。永楽焼は京焼の一種で、幕末から明治にかけて永楽保全、和全親子の名工を中心に赤絵、金襴手の鮮やかな作品を世に送り出している。



36. 紅溜塗螺鈿飯器揃 漆、螺鈿

朱漆を下塗りしその上から透明度の高い透漆を塗って仕上げたものに、貝編片をはめ込んだ螺鈿で飾った見事な飯器。梅のデザイン。



37. 盃洗 (金蒔絵漆塗)

黒漆に金蒔絵の鮮やかな盃洗。酒を酌み交わす際、水を張ったこの器で盃をすすいで返杯する。内側に鶴と松。外側には福・禄・寿の文字が施されている。



40. 金蒔絵重箱与の重 漆、金

黒漆に金蒔絵の鶴と雲を配した豪華な重箱。晴の日の料理を入れるもの。四季を表す四重が正式とされ、四段のものは「四」の字忌避で「与の重」と呼ぶ。

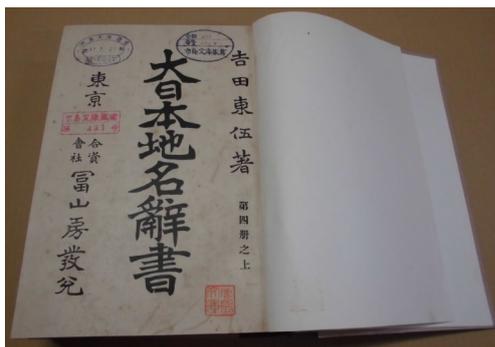
市島邸 資料館リニューアル展示 近代市島家の生活と文化事業

近代市島家の生活と文化事業

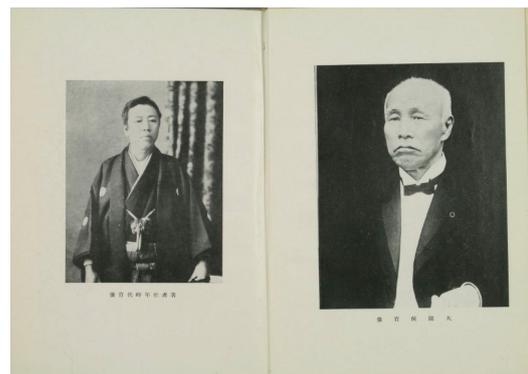
明治以降も千町歩地主として発展をつづけた市島家は、江戸時代の歴代当主がそうであったように、さまざまな文化事業、社会事業に関わってゆきます。特に8代当主徳次郎(湖月)は、角市家当主の市島謙吉(春城)を通じて、早稲田大学の基金募集や大隈重信の名のもとに進める出版事業にも協力、他にも春城の縁戚にあたる地理学者、吉田東伍が独力で編纂を進めた『大日本地名辞書』刊行を援けるなど、文化事業への助力を惜しみませんでした。

また市島家は貧窮農民の救済など、江戸時代から社会福祉事業に力を注いできました。湖月はもちろん、9代・徳厚もさまざまな形で社会貢献をしていたようです。湖月の頃には市島家ゆかりの子弟を中心に学費援助をして県内外の学校への進学を促し、徳厚の時代になると「資産は乏しくとも向学心に燃え、将来を嘱望される青年の薫育に資するために」という考えのもと、東京の別邸に市島塾が設立されました。市島塾には塾舎で暮らす「塾生」と、学費などの経済的支援のみを受ける「塾外生」がいましたが、彼らの出身地を見ると、新潟県内はもちろん県外の学生たちも支援の対象となっていたことがわかります。塾生(塾外生)の活躍を通じて、市島家の社会貢献の思いは全国各地に広まることとなりました。

こうした市島家の活動を支えたのはそこで働く職員たちでした。湖月の晩年、明治35年(1902)前後には、市島家では事務処理の近代化を進め、現在の会社組織のような事務機構へと変換してゆきますが、それでも当主をはじめとした市島家と職員たちとの間は強い絆で結ばれていたようです。



49. 大日本地名辞書 吉田東伍著
富山房、明治33-40年(1900-1907)



44. 大隈重信と市島春城
市島春城『回顧録』口絵(中央公論社、昭和16年)

市島邸 資料館リニューアル展示

近代市島家の生活と文化事業



4 1. 貴族院多額納税者議員互選人名
朝野新聞4978号（明治23年5月16日）

自由民権運動、そして明治14年の政変の産物ともいえる国会の開設がこの年11月に迫っていた。議会は土族、平民から選挙で選ばれる衆議院と、皇族、華族などの他、多額納税者の互選で議員が選出される貴族院からなっていた。これは県別にまとめられた多額納税者の一覧で、この中から各県1名ずつが選ばれることとなった。新潟県では納税額筆頭で記されている宗家8代市島徳次郎（号 湖月）が、貴族院議員として選出されることとなる。



4 2. 新潟県下政治家人物競（明治23年1月20日）

国会開設がいよいよ目前に迫る中で作成された新潟県下の政治家一覧表で7月の第1回帝国議会衆議院議員選挙の候補者リストともいえる。番付風に仕立てられた右側（東方）には市島謙吉を筆頭に改進黨の面々が並び、左側（西方）には大同派が並ぶ。また裏面にはこの年半数が改選される新潟県会議員の候補者が並んでいるが、いずれも改進黨の人々であり、表面の配置（右に改進黨）と合わせ、本資料が改進黨によって作成されたことがわかる。



4 3. 市島邸を訪れた大隈重信と綾子夫人
大正2年（1913）9月14日

早稲田大学では、学生の募集、各種募金などに際し、早くから地方との連携を進めてきたが、創設者大隈重信は、そうした地方の校友や有力者のもとを訪れ、交流を深めていった。特に新潟県は市島春城の出身地ということもありつながりが強く、東京専門学校（のちの早稲田大学）創立当初学生総数1088名のうち63名が新潟県から入学した者たちだった（最多は東京で104名）。また早稲田大学開校にあたっておこなった募金活動では募金者総数1555名の1割、156名が新潟からのものであった。

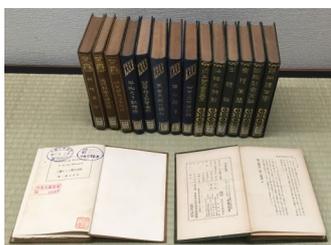
この写真は、大隈が夫人とともに新潟をはじめ北陸各県を訪問した際、春城の手配で市島邸湖月閣に宿泊した折に撮影したもの。



4 5. 国書刊行会叢書

国書刊行会

国書刊行会はそれまで未刊行であった江戸期以前の稀覯本について、「可成廉価で是非保存を要し且つ世益になるものを」翻刻、刊行したもの。（『余生児戯』『国書刊行会の思ひ出』）大隈重信を総裁に戴き、市島春城がその実務を担当した。出版点数は大正末までに260冊を数える。一般に国書刊行本と称され、その成果には今日の研究者も多大な恩恵を蒙っている。「春城八十年の覚書」（早稲田大学図書館、昭和35年。春城自筆原本〈昭和15年〉も同館所蔵）に「自分は図書館の衝に当たってから益々図書の趣味を覚え、図書出版事業に関係することになった。早大出版部の出版事業は勿論の事、大隈侯を総裁に重野博士を会長に挙げ日本国書刊行会を起し、塙検校の群書類従の出版に倣ふて、未完の国書を出版するの業を起し、四年間没頭して、多くの有益の書を出版し、それが永久に生命をもっている」とある。



4 6. 大日本文明協会叢書 明治41年（1908）

大日本文明協会

明治41年（1908）、大隈重信が主唱する「東西文明の調和」を出版事業の面から具体化する事業で、大隈を会長に実務は市島春城が担当した。「最近欧米の最も健全なる思想を代表せる名著を記述、解説し以てわが邦人をして世界文化の潮流に接触せしめんと欲する」（典拠をあきらかに）こと、すなわち、欧米の種々の研究書を翻訳、出版し、人々に知らしめようとしたものである。『欧米人之日本観』上・中・下三冊を最初に刊行した後、大隈の没後も刊行を継続し、欧米文化の紹介に貢献した。市島家とも交流のあった渋沢栄一も特別賛助会員として関与し、大正13年に大隈邸で開催された大日本文明協会評議員会で日米問題に関する談話をなしている。

市島邸 資料館リニューアル展示 近代市島家の生活と文化事業

市島塾

「資産は乏しくとも向学心に燃え、将来を嘱望される青年の薫育に資するために」という考えのもと、市島徳厚により設立された私塾です。大正14年(1925)、東京駒込林町の市島家別邸にて開塾、初代塾頭には大著『大漢和辞典』の編者として知られる漢学者の諸橋轍次が就任、顧問として市島謙吉(春城)、市島家や諸橋とも遠戚にあたる社会学者の建部遯吾などが委嘱されました。定員は6名で塾内での経費の負担や卒業後の条件などは一切なく、学業に専念できる申し分のない学習環境でした。朝夕の食事の他、塾内に図書館、卓球台、テニスコートも備えた充実したものでした。また塾外生の制度として毎年10数名の学生に奨学金を出し、援助していました。塾生(塾外生)は新潟出身の者が多くいましたが、中には兵庫、東京、福島といった県外の学生も含まれていました。



市島塾塾頭・諸橋轍次と学生たち

中央で腕組みをする人物が諸橋。背景の建物が市島塾の塾舎である。

(市島徳厚所蔵アルバムより)

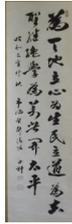
市島邸 資料館リニューアル展示

近代市島家の生活と文化事業



48. 大漢和辞典
諸橋轍次編 昭和35年(1960)

諸橋轍次(もろはし てつじ) 明治16年(1883)～昭和57年(1982)
「市島塾」初代塾頭、漢学者。新潟県南蒲原郡下田村(現、三条市)の庄屋の家に生まれ新潟県第一師範学校、東京高等師範学校を卒業。同校で漢学の教授をする傍ら中国へ留学、完成度の高い辞典が必要な事を痛感し、自らその編纂を試みる。昭和4年(1930)製作を開始、昭和18年(1943)に第1巻を刊行するも戦災により資料等全てが焼けてしまい、戦後残された校正刷をもとにして再開。約30年の歳月をかけて昭和35年78歳の時に5万語の親文字、熟語52万語という世界でも類を見ない大著『大漢和辞典』全13巻が完結した。この功績により昭和43年(1968)、文化勲章を受章した。



47. 諸橋轍次二行書書幅「為天地立心」
昭和34年(1959)8月 紙本墨書

市島塾塾頭をつとめた諸橋轍次(1883～1982)の書幅。「市嶋賢契」とあるので、諸橋より年下の友人、すなわち宗家9代徳厚(1893～1959)のことか。中国北宋時代の儒学者、張載(横渠、1020～1077)の言葉で、天下のため、人々のために志を立て、学問の継承に尽力し、太平の世を開かんとしたとは、まさに徳厚の生涯そのものと言えるかもしれない。この年8月29日、徳厚はその生涯を終える。果たして諸橋のこの書は、死の床にあった徳厚のもとに届いたのであろうか。

「為天地立心 为生民立道 为去聖繼絶学 为万世開太平」



建部遯吾(たけべ とんご) 明治4年(1871)～昭和20年(1945)
「市島塾」顧問。社会学者、政治家。新潟県中蒲原郡横越村(現、新潟市江南区)の庄屋建部蔵軒(諸橋慶三郎)の五男として生まれた。市島家分家の「葛塚市島」初代助次郎の夫人である千代は、建部家の出身であった。また、『大漢和辞典』を編纂した諸橋轍次は遯吾の従兄弟にあたる。母校東京帝大の社会学教授となり退官後は衆議院議員を経て昭和13年(1938)に貴族院議員となった。



吉田東伍(よしだ とうご) 元治元年(1864)～大正7年(1918)
歴史地理学者、早稲田大学教授。越後国蒲原郡保田村(現、阿賀野市)の山林地主旗野家に生まれる。明治17年、大鹿新田(現、新潟市秋葉区)の吉田家へ婿養子となる。新潟英語学校中退後、姻戚、市島謙吉(春城)のもとに身を寄せ春城が主筆をつとめたこともある読売新聞記者となり、「落後生」のペンネームで斬新な史論を連載、評判を呼んだ。主に、早稲田大学の図書館に通い全国各地の地名を独力で調査し、明治40年畢生の名著とも言うべき『大日本地名辞書』の刊行を実現した。この功績が認められ明治42年に文学博士となった。



50. 市島塾々生原簿・市島塾々外生原簿・市島塾々外生費目年鑑
大正15年～昭和18年 (複製)

市島塾に在籍した人々の姓名、略歴と毎年の個別の給付額の一覧。創設期からの入塾者が、出身校と進学先、さらには退塾後の就職先まで記載されている。新潟県内出身者がほとんどだが、中には東京、高知といった県外学生も含まれており、進学先は東京帝国大学が多くを占めている。一方塾外生は、東京別邸におかれた塾で生活するのではなく、資金援助を中心とした補助を受けていたと思われ、新発田中学出身者が多くを占めている。費目年鑑には、開塾以前の1904年(明治37)から1925年(大正14)までの支援の詳細が記されており、市島家による育英事業が、徳次郎(湖月)から徳厚に受け継がれたことがわかる。宗家以外の市島家の人々や市島邸の事務員、その家族もまた支援の対象となっていた。

国立国会図書館蔵<国立国会図書館デジタルコレクションより>

市島邸 資料館リニューアル展示

近代市島家の生活と文化事業



5 1. 市島宗家予算・決算関係書類一括

明治時代後期から事務組織の近代化を進めた市島家では、各部門、本邸・別邸それぞれで事務処理を進めて帳簿を作成、最終的に本邸が全体の管理をし、当主である徳厚に報告されていた。ここに展示した資料はそのほんの一部である。ただ、こうした運営体制も戦時下の混乱のうちに継続が難しくなり、敗戦後は徳厚みずから処理をすることも多くなった。



5 2. 市島家家政文書用版木一括

市島家では部門ごと、本邸・別邸ごとに多様化する日常業務を迅速、的確に処理するためそれぞれ専用の書式を作成した。これはその用箋等の印刷に使われた版木の一部。



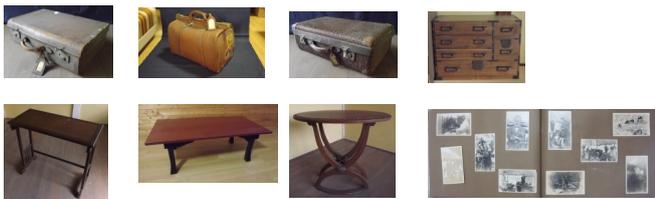
5 3. 市島家事務所職員（写真）

江戸時代以降、大量の土地集積を実現し「千町歩地主」となった市島家では、複数の番頭と手代を中心として家政が運営されていた。宗家8代徳次郎（湖月）の晩年である明治35年（1902）ころからは、そうした旧体制をより実務に即した運営体制へと徐々に変更していった。そこでは家長のもと、総取締や総務理事、さらには重役会議がおかれ、その下に総務部、事業部、内事部などの実務担当箇所を設置、事務処理の合理化が進められた。ただ、そうした体制になっても、家長と使用人との間は強い絆で結ばれていたようである。この写真は、湖月と「天王 市島事務所」の職員のものである。



5 4. 市島ジュン米寿祝貼込屏風
市島事務所職員から市島ジュン 昭和16年（1941）

宗家8代市島徳次郎（号・湖月）の妻ジュン（順、1854－1943）の米寿にあたり、市島家で働く職員たちが歌を詠み、書画を寄せ祝ったもの。色紙にある「萱堂」とは「母」を意味し、ジュン、ひいては市島家の人々と職員がいかに親しい関係であったかをうかがわせる。



5 5. 市島徳厚所用品（湖月時代からのものを含む）

市島邸資料館リニューアル展示のようす



- 解説文作成 藤原秀之（早稲田大学図書館）、今野真理子（市島邸）
- 展示設営 藤原秀之（早稲田大学図書館）、今野真理子（市島邸）、山田諭志（新発田市）

市島邸資料館再開記念

藤原 秀之 氏 ギャラリートーク

2016年

10月1日 土

午前の部 午前10時～

午後の部 午後2時～

会場 **市島邸** (新発田市天王1563)

講師 **藤原 秀之 氏**

早稲田大学戸山図書館担当課長

入場料 無料

定員 各回とも20人(先着)

申込 新発田市観光振興課

(・0254-28-9960)



主催/新発田市 協力/早稲田大学図書館
お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

